

女神ベローナとは何者か

—— ロジェカイヨワ『戦争論』を反駁する。 ——

蓮 沼 啓 介

0. 始めに

まず始めに原題と訳題の関連について一言触れて置く。⁽¹⁾

原題はBELLONEである。副題が付いている。ou la pente de la guerre が副題である。guerre は戦いであり戦さであり戦争であるし、pente は傾きであり傾向である。戦いに傾く気質といった意味の副題である。

ベローナ（フランス名ペローネ）とは古代ローマ人によって祭られていた戦いの女神の名であるが、軍神マルスの妻とも妹ともいう。おそらくは春の女神なのであろう。訳者は副題を「われわれの内にひそむ女神ベローナ」と訳出している。

訳題は『戦争論』である。戦争賛美の理論や戦争畏怖の理論が紹介されているし、また戦争の分類も行われているので、戦争が主題の書物と捉えて内容に即した副題を付したものと思われる。実際に本書では戦争について次の二つの問題が取り上げられている。

二つの問題とは何か。

第一は戦争の起源であるが、この問題については題名が暗示するだけに止まっていて、直接には取り上げられていない。闘争本能が人間には備わっているため戦いや戦争を無くすことはそもそも不可能であるという見解を暗示しているわけである。

第二の問題は全体戦争の起源である。これは極めて新しい問題である。全体戦争は20世紀の発明品である。この点で映画に良く似ている。映画は大衆の娯楽であるし、全体戦争は大衆の苦難である。

国民戦争が拡大して全体戦争に至った。規模の拡大がその起源である。これがロジェカイヨワの主張の眼目である。全体戦争は人類の呪われた宿命である。これがロジェカイヨワの到達点である。

こうした戦争論は戦争賛美の理論と戦争畏怖の理論の更なる発展形態と位置づけられる。戦争運命という第三世代の戦争論である。

続いて第一世代と第二世代の戦争論である戦争を賛美する理論と戦争を畏怖する理論を一見しよう。

1. 戦争は魔力を持つ。

戦争には怪しい魅力が伴っている。その魔力は人の心を引きつけてやまない。

戦争の讃歌には二種類のものがある。一はその素晴らしさを讃える理論である。

二はその畏れ多さやおどろおどろしさに立ち止まり戦争の神聖さの前に懼れひれ伏す理論である。戦争を神聖な神の顕現としてあがめてその前にひれ伏す理論である。

1-1. 戦争は素晴らしい。

戦争を賛美する理論が盛んであった一時期がかつ

(1) ロジェカイヨワ『戦争論』秋枝茂夫訳、法政大学出版局、1974年

であった。

ド・メーストルも戦争賛美者の一人である。⁽²⁾

彼は戦さを、良識の発現の一例であるとし、動かし難く正しい道理の発現であると見た。軍人という職業は、徳と温和な心を培うところであって、もっとも温和な人物こそ、戦さを好み、戦いを欲し、情熱をもって戦争を行うのだという。

「真の武人は、恐るべき殺戮の光景に接することによって、無慈悲になったりするものではない。彼自身が流さしめた血の海の只中にあって、なおかつ彼は人間的なのである」172（訳書の頁数である。以下同）

ブルードンも戦争の賛美者の一人である。⁽³⁾

ブルードン『戦争の現象学』の目次には「正義の現れとしての戦争」「理想の現れとしての戦争」「人類の規律としての戦争」「戦争を行う人間は自然よりも偉大である」などが並んでいる。

ブルードンによれば戦争は人間と動物を区別する出来事である。人間は戦いに臨んで誇りや英雄としての振る舞いを発揮する。こうしたことは動物には見られない。動物はただ相手に勝とうとして食いつくだけである。戦争は人間の理性や意思を越えた出来事であり、神の御業の一つである。戦争の出現は、神の顕現の様な値打ちを有している。これは質問も疑念も差し挟む余地のない明々白々たる事実である。戦争は神の法を地上に具体化する出来事であって、正義と詩情のこの上ない表明である。もしも戦いがなかったならば、人間はあらゆる分野においてもっと卑小で矮小な存在になっていたことであろう。個人生活も社交生活も、文化的にも芸術的にも実り少なく、まるでアメリカ文明のように、不毛

で退屈極まりないものとなっていたことであろう。

また戦争は神の審判という動かしがたい判決をもたらす。それは控訴や上告の道が塞がれた最終審そのものであり、国家の運命を決定する。戦争は国家が付けている仮面を引き剥がし剥ぎ取り、その国民の本当の素顔をさらけ出す。民衆達の値打ちと運命を見定め暴露してしまう。

「戦争、それはわれわれの歴史であり、われわれの生活であり、われわれの魂そのものである。それは立法であり、政治であり、国家であり、祖国であり、社会を階級に分けるものであり、人々の権利であり、詩であり神学である。要するにそれはすべてなのだ」177

こうした戦争の賛美にもかかわらずブルードンはこの本の終わりでは人類はもはや戦争を望んだり欲しがったりしてはいないという結論に至っている。国民軍同士では互いに祖国防衛の一点張りでありどちらの国も相手国に攻め込む事はしないので、戦争にならないからである。

ラスキンもまた戦争の賛美者である。美学者であったラスキンの戦争賛美はその美術的な直観に基づいている。⁽⁴⁾

優れた美術は戦士の文化からしか生まれえない。農耕民や牧畜民は芸術作品を生まないし、工業や商業も芸術創造の芽を育てることはなくただその芽を摘むだけのことであり、それに対して、戦争は偉大な芸術の源泉であった。偉大な芸術とは戦争の描写であり、その讃辞であり、その劇的な表現であった。古代のギリシャにおいてアポロンやパラスは武の神であった。⁽⁵⁾偉大な叙事詩とは要するに戦争の物語である。

(2) ジョセフ・ド・メーストルはイタリア国境に近いサヴォアの上院議員で1792年にフランスを離れ、1803年から1817年までセント・ペテルスブルグの宮廷において、サルジニア王の公使を務めている。この時代に生じた色々な出来事の精神的な意味について、深い関心を示し、『セント・ペテルスブルグ夜話』を著し、第七話では戦争の問題を取り上げている（1821年）。

(3) フランスの経済学者。日本では空想的な社会主義者として知られている。

(4) Ruskin, John. The Crown of Wild Olive: Three Lectures on Work, Traffic and War. 1866

(5) 女神アテナの別名。かつてアクロポリスの丘に聳え立つパルテノンの神殿には武装した女神である巨大なアテナの彫像が祀られていた。

近代においても事情はさのみ変らない。古代と同じことである。偉大な国民は戦争から生まれる。国民を偉大にするのは戦争である。安逸な平和が続けば国民の精神は墮落してしまう。

「要するに、すべての偉大な国民は戦さのなかで、言葉のもつ真実と理想のうちにひそむ力とを学んだのだ。私が発見したのはこのことである。彼らは戦さからその栄養を引き出し、和平のうちにそれを使い果たしてしてしまう。戦さが彼らを導き、和平が彼らを欺く。戦さが彼らを教育し、和平が彼らを駄目にする。一言でいえば、彼らは戦さから生まれ、和平のうちに亡ぶのだということを、私は発見したのである」180。

芸術作品は、色々な文化の価値を計量する適切な規準となる。というのもそれは純粋な表出だからである。またそれは文化としての値打ちを示す証拠の一つであることに間違いは無い。芸術作品には大切な物事がすべて盛り込まれている。そこに取り上げられていないものはおおむね取るに足らぬものばかりである。戦争と芸術は密接な関係を持つ。とすれば戦争とは芸術と肩を並べる素晴らしい企てである。ラスキン是这样した結論を大胆に引き出している。

「それゆえ私が、戦さこそ一切の芸術の基礎であるという時、私は同時にいま一つのことをいいたいのである。すなわち戦さは人間の持つあらゆる高貴な徳と優れた能力の根本なのだ、と」179

古代ギリシャにおいて戦士貴族たちが産み出した精神文化に熱情的な憧れを込めて、ラスキンは激的な言葉を並べて戦争の魅力を賛美し続けるのである。

1-2. 戦争は恐れ多くも眩暈がするほどまばゆい。

第一次世界大戦の後に戦争を畏怖し畏敬する理論

が登場する。戦争は神聖な戦いである。

ルネ・カントンによれば戦さ場は闘争本能という生物にとって自然の法則を発露する日常性を越えた場所である。1925年に死去したルネ・カントンという生物学者の著した『戦さについての箴言』という本が1930年に出版された。⁽⁶⁾カントンは箴言という形を使って戦争を称賛しているが、カントンにとって戦さは神聖なものであった。

カントンは戦いを男性の自然な状態と考えた。子育てが女性に対して精神的な美しさを与えるように、戦いは男たちに精神的な美しさを与える。自己保存の本能とは「戦って死ぬべく生まれた存在」を、戦場にまで生きたまま連れてゆくためのものに過ぎない。戦場という場所においてはじめて男たちは本来の自分自身に出会い、その様々の能力が発揮され魅力が輝き出す。「戦いの人間に対するは、滑らかな水面の白鳥に対すると同じである。すなわち、その美しさが表現される場所である」(57頁)。戦いの過酷さが人間に神聖さを培い、男たちに高貴さを与える。「人はそこにおいて、貧しさの故に卑しめられることもなく、虚栄はここにその座を持たない。魂は義務を全うすることにより安らぎ、そこでは無意義なる人との出会いはないし、人間は、みなはらからである。げに戦いは、黄金の時代である」(58～59頁)。戦さは人間に宗教的な感情を与え、あらゆる物事を遠く離れた小さなものに変えてしまう。戦さは魂を癒し、財貨の分配といったけちくさい物欲を遠ざける。なぜならば子育てがそうであるように、戦いは愛他の精神を学ぶ場所であるからだ、戦いのそとに置かれた人間は「小さな汚れたもの。」でしかない。また戦さは、共同生活という、人為的な義務を人間に課する。戦さが人間を満足させるのは、そのためである。

「日々の単調な生活。昨日もなければ今日も無い。これが戦さ場の幸せである。まるで拷問のように

(6) Rene Quinton, *Maximes sur la guerre*. Paris.1930

人々を苛み苦しめる様々な目標。他人に見えを張らねばならない気苦労。差別や不平等の苦しみ。社会的地位の不公正。努力するものの孤独。誰の助けも望めない闘争。難問解決のための労苦。自己の使命に対する疑い。どんなに頑張っても勇気を振るっても達成されることのない欲望。次々と顕われる誘惑。一向に変わることはない現状。こういった色々な社会的な束縛が一瞬にして消え去っててしまう。」196-7

戦場は神聖な場所である。人間は男たちはそこで自分が新しい真実に近づいて行くのを感じ取る。そこで人間は男たちは、大聖堂のなかにおけるような静寂と無限に出会いそれを知る。

「戦いの最前線においては、すべてが恐れであり、神秘であり、魅力であり、快楽である。初恋は魂を虜にするが、戦いも初恋のように魂を虜にして止まない。敵との出会いは恋人との出会いである。休戦中の最前線は眠っている女たちのように男心を惹き付けてやまない。」200

戦争は平和をもたらすから価値を有するのではもはやない。文明の退屈さを破壊するところに戦争の値打ちがある。平和に何らかの価値があるという思想そのものが既に否定されている。戦争という事実そのものが人を満足させる。戦争があることそのものに人は満足し、戦さや戦いが世界を荒廃させ、人を抹殺することそのものに人は満足するというのである。戦争は神聖な出来事である。

文明の破壊に戦争の魅力がある。人間の殺戮に戦争の魔力が詰まっているというのである。

19世紀に現れた戦争礼賛論とカントンの戦争擁護論の違いは明白である。

ド・メーストル、ブルードン、ラスキンたちは戦争が色々な良き物事をもたらす産み出す出来事であるとして戦争を礼賛した。戦さや戦いは名誉を、芸術をそして文化を産み育てる根源的な力を有していると彼らはいふ。戦争は文明を進歩させ、退屈な日常を越えた魅力溢れる物事を生む根源であるから彼

らは戦争を称賛する。これに対してカントンは戦争が文明を破壊し、人間すなわち男たちを粗野で野蛮で粗暴な自然の状態に戻すというその故に、戦争を神聖な出来事と見なして崇めているのである。

戦争そのものもはや政治の道具という手段の位置から抜け出してしまう。それは目的そのものとなる。戦争は平和という永久の価値を守り回復する手段という従属的な地位に止まる事象ではない。平和に何らかの価値があるという思想そのものが否定される。戦争が起こる事そのことが素晴らしい。戦争が世界を荒廃させ、人々を殺害し抹殺することが、人の心を惹き付けてやまないのである。

エルンスト・ユンガーによれば戦争は文明の桎梏を破壊して自然の闘争本能を解き放つ聖域である。巨大な殺人装置と化した戦争に受動的に吞み込まれるくらいなら、陶醉して戦争に没入する方がずっとましである。かれは1920年に精鋭部隊の将校として自ら経験したところの体験を『鋼の嵐の中で』という本の中で語った。その後の著作の中では近代的な戦争が人間にとって技術的となり抽象的となり無人格的となってしまう、如何ともし難いものに変質してしまったことを率直に確認している。戦争が一つの巨大な工場地帯として現れるとき、戦争は人間たちに只の武器となり一種の機械となることを要求する。戦争が要求するのは「壮大にしてしかも残酷な秩序の支配するいとも複雑な全体のなかで、その決められた地位を占めることである」202。人間たちは巨大な機械のほんの小さな部品に過ぎず瑣末で矮小なボルトや歯車でしかもはやない。

このような秩序をそっくりそのまま受け入れるとき、人間たちは偉大となり、その真の自由をそこに見いだす事が出来る。人間にとってこの真の自由というのは、ある崇高な行動に全面的におのれを捧げることにはほかならない。個人は群衆のなかに吸収され、厳しい規律の下に置かれる。その結果、人格は消滅し、人間は国家の手中にある単なる道具にすぎなくなってしまう。

カントンとは異なってユンガーは戦争の持つ技術的な側面にも着目する。かつて銃弾が人を殺傷して戦争の形を大きく変えたことがあるが、いまでは戦争の技術は格段に発達して戦闘員を大量に抹殺するに至ったことを強調する。そして将来については、戦争が更に機械化を遂げることを、また戦争が更に恐ろしくきびしいものになることを、予見し先取りしていた。こうした事実や予想は驚くべき事に彼にとっては喜びの源であった。『内的経験としての戦闘』という本のなかで、彼は壮大な暗黒を伝えるとも言われぬ熱狂を込めて、戦争は決定的な啓示であることを語っている。戦争は、存在の全的形態にほかならない。その前にあっては、一切のものがその色を失い、消え去ってしまう。戦争によってのみ人生は最高の高みに到達する。崇高な血みどろの遊戯である戦争は神々を喜ばしめる。戦争は時を越えた意義を持つ。戦争は科学や芸術よりもはるかに深い存在の深みから、ほとばしり出たものであり、科学や芸術より高貴な証しそのものである。それは純にして正、また豊饒にしてしかも強烈なるものである。大戦争という華麗なる出来事は、連綿とつづく歴史の緯糸を司っているところの、永遠なる力をあらわにする。「これらの大戦争は時としてまったく冷淡な顔色をしていて、戦争の前に置かれた人間たちが至高なる意志の道具にすぎないことを示す」203

戦争は変質した。こうなってしまったからには、戦争はもはや自分自身以外に目的を持つものではない。戦争それ事態が自己目的であって、他の目的に奉仕する企てではもはやありえない。戦争はその全体において、秘蹟であり恍惚であり、象徴であり秘密である。このような高い見地からみれば、侵略はおろか勝利といえどもものの数ではない。人々が戦争のうちに望むのは、自己存在の変革である。別の存在になる。各人が自らの本質を発見し実現する又とない機会を戦争は与えてくれる。戦争は戦士を創り出す。戦う者たちを白熱した存在にまで高める。

戦う者は輝いている。戦う者たちはそこで燃え尽き、眩いまでの光の中で戦争を造る造物主となる。神々に近い存在となる。

「戦争はわれわれの母であるばかりではない。それはわれわれの子でもある。われわれを創り出したのは戦争であるが、戦争を生んだのはわれわれである。われわれは打ち鍛えられ彫り刻まれてできた鋼の部品である。しかし同時に、これを鍛える槌を振るい、これを彫り刻むノミを振るったのもわれわれである。われわれは、火花を散らす鋼であり、同時にこれを鍛える鍛冶職人である。自らの苦悩を抱えた仕事師であり、自らの信仰に殉ずる殉教者である」204

戦争の来臨は、真実の顕現にほかならない。戦争は一切の虚偽、うわべ、欺瞞を消し去ってしまう。戦争は、人々の行う日常の茶番劇に一時終止符を打つ。

原生的で未開の諸力が噴出して、文明という名の脆弱な上塗りは苦もなく破り裂かれ捨てられる。仮面は剥げ落ちる。時を経て変る事のない数々の欲望が台頭する。

「この狂宴のなかに、慎みなどかなぐり捨てた人間たちがその本当の姿を現わす。社会と法によって永いあいだ抑えられていたその本能が、ふたたび本質的なもの、神聖なるもの、至高の理由として顕われる」205

ひとたび深奥に秘められた粗暴さにまで立ち返ると、人間たち特に男たちは一撃のもとに仕来りや慣習を打ち砕く。このようなものはほろほろの衣にすぎない。一方では本能の噴出は止まらない。

「魂の底にひそんでいた動物性が、神秘的な魔物のように躍り出る。それは一切を灰燼に帰する火焰のように噴出する。それはまた、群衆をいやおうなしに酔いしれさせてしまう脱魂状態のようなものであり、また、万軍を支配する神のようなものである」205

こうした状態に入れば、石器時代から延々として

行われて来た武器改良の工夫も、たいした意味を持つことにはならない。時代時代により武器こそ変われ、殺戮の欲望はまったく同じものでしかない。もちろん爆薬そのものは物質でしかない。自分でかってに動くことはないし、盲目的で言葉を理解しない道具にすぎないものである。けれどもそれは、永遠に変らぬ敵を殺すという意志の、いまの世における現れにすぎない。

戦争に加わる者はまた、自分が堪え難い圧迫から解き放たれたと感じる。

「突撃の時を待つ兵士の体は、激しい恐怖のため硬直する。恐怖が彼をとらえ、自分が破砕される予感が彼をさいなむ。けれどもすぐこの恐怖は、おのれを示したいという欲求により一掃される。やがて、戦闘が霧を吹き払う。人間は、その最古の故国に戻った自分を見出す。忽然として目覚めた凶暴性は、人間をその存在の極限にまで押しやり、人間に対してその持てる意志と力をことごとく濫費しつくすよう要求する」205-6

機械はだんだんに、物を破壊しようという熱意を充分に実行しうるものになっていった。機械とは「民族の知性が鋼鉄のなかに流し固められたもの」のことである。機械によって、個人の力は無限に増大されたが、その一方、個人の役割と重要さはぐんぐんと小さくなった。とはいえ、機械を造るのは人間であるし、それを設置するのも人間であり、それを使用するのも人間である。そしてこの機械の後ろには、現代国家という厳密でしかも飽く事を知らぬ一つの機構が、またその冷厳な方針が、広大な工業地帯が、発明に熱中する研究所が、死の機械を果てしなく組み立てる幾千とも知れぬ働き手たちが、隠れているのである。

このような機械のごとき精密さをもって、ただ一つの恐ろしい計画にすべての人間とすべての道具がことごとく従属してしまう。こうした現象の彼方にユンガーは壮大な蘭の花を見た。そこではすべてが完璧である。ユンガーは戦争という壮大な企てのな

かに完成された美術品のごときまばゆい何かを発見し、その美しさに見とれ酔い痴れてしまうのである。

戦争にただ引きずり込まれるだけで、いやいや巻き込まれるだけの受動的な奴隷の様な状態を脱して、戦争に自らのめり込みすべてを悟った者には、戦争の「無慈悲なまでの壮大さ」が存分に理解できるようになる。更に技術が戦争を一層進んだものにしてゆくことであろう。ユンガーの予感を裏付ける事態には次の様なものがある。現状においては科学の進歩や国々の大きさやその生産能力や政治構造の強固さやイデオロギーの対立などなどによって、抗争の諸条件が規定されている。そしてこれらの諸条件が強化され、戦争をますます法外なものに拡大してゆく。戦争に非人間的な激しさと広がりを与えるのも、これらの条件である。それはまた戦争に、得体の知れぬ、盲目的で、組織的で、残酷かつ均衡を破った奇怪な容貌を与える。個人はこの戦争の醜くもおどろおどろしい容貌に触れるとき、個人というものがどうにもならないくらいに無意味なものでないことを、認めざるをえない。もはや個人には何の価値もない。こうした苦い真実を個人は受け入れざるをえない。

戦争が持つこうした性格はかつては戦争を礼賛する理由とされて来た。戦さや戦いが人間と同水準にあったあいだは、戦争それ自体を神聖視するものは一人もいなかった。けれども戦争は、次第に人間を調教し、人間を押し潰すようになっていく。人間は戦争という名の機械に対して何の手出しもできず、この機械はその物量と理解不能なまでの複雑性によって、人間を呆然とさせるまでになった。この時に至って、鋭い宗教感覚をもつ人びとは戦争を、一種の形而上学的な高みにあるものと考えようになった。戦争は時間のはじめからこの世界全体を、この高みからつかさどってきたのだ。

ユンガーはこの著作の終わりに当って次のような信念を披瀝している。

「戦闘というものに向かって、様々な力が絶えることなく展開してゆくという、この事実を前にするとき、一切の営為が消え失せ、一切の思考がその価値を失う。人はそこに、世界の根本原理をなすところの、ある不可思議な力の現れを認める。この力は、これまでつねに存在し、これからもずっと存在するものなのである。人間が絶滅し、従って戦争も無くなってしまったずっとずっと後までも」207-8

ユンガーの著作の結論はこう結ばれている。それは戦争の戦慄すべき恐怖そのものが惹き起こした眩暈を、極端論に仕立てあげるものであった。

戦争の神の降臨。その女神の名はペローナという。ロジェカイヨワはこう言いたげである。だがそれは邪悪神アフラマンユでこそあれ、女神ペローナとは異なる破壊神の降臨であったのではないだろうか。

そもそも戦争とは人類にとって宿命であり避け難い運命なのであろうか。

2. 戦争の種類

戦争には色々な種類がある。ロジェカイヨワは次のような種類の戦争を並べてその分類を試みている。

(1) 征服戦争

未開の部族に始まる奴隷獲得の戦争である。未開の部族の中には平和を好む部族と戦闘を好む部族があることが知られている。ロジェカイヨワは互いに隣接して近隣関係にあるバ・ヤカ族とバ・ムバラ族の事例を挙げている。バ・ムバラ族は平和的な部族であって、社会的な分化がほとんどない状態にあるのに対して、バ・ヤカ族は非常に戦闘的な部族であって、厳しく隔てられた身分階層を有している。外部の部族との戦闘を介して内部構造が戦闘に適した社会に変容して行く様子が窺われる。またブルー族の事例がある。一人の首長に支配されており、首長は洋式の軍律について知識を有し、これを

自分の周りに応用することを実行した。更にダホメの諸部族では一人が絶対の首長となり諸部族をその王権の下に統一していた。この首長は臣下の生命と財産を思いのままに処分する力を持っていた。この首長は常備軍と専門警察を備えていた。こうした社会の構成は新しいものであるが、もともと征服と奴隷の売買という慣行に基づいて成立した形態である。征服戦争は奴隷を獲得することを目的とする戦争である。征服による奴隷の獲得が次第に戦闘狩猟者と採集農耕者に分化する社会を産み出して行くことが観察される。

(2) 帝国戦争

帝国戦争とは強大な軍事力を持つ強国が異民族を併合するために行う戦争のことである。古代のローマ帝国やサラセン帝国またモンゴル帝国の行った征服戦争がその典型的な事例である。19世紀に西ヨーロッパの強国が行った植民地獲得の戦争もこの部類に入る戦争である。帝国を造り上げる部族は周辺の諸部族とさして異なるものではなかった。ただ軍事を中心に経済や政治に独自の構造が生まれ、広大な帝国を産み出すに至る。規律が蛮勇に勝り、儉約が奢侈に勝り、着実が不用意に勝るといった特質が普く認められる。帝国戦争はほぼ互角の位置にある二つの軍団や二つの国民の衝突ではもはやない。帝国戦争には本来的な不均等性が認められる。一方には制度の調った国家がある。他方には水準の低い民族がある。一方は他方を服従させつつ吸収し、自らの習俗や技術や制度や信仰や偏執や果ては悪徳までも学ばせ、また強制する。

イスラムとは「征服」を意味している。言い換えれば、好戦的で不安定かつ無政府的な小民族を、政治的宗教的、更にまた経済的かつ軍事的な統一組織に、統合することを意味している。征服はいつも力によって行われるとは限らない。

自然な形で合併や合意や要望に応じて、意志的に併合の行われた場合も数多くある。エデュアン

⁽⁷⁾ 族の代表者たちは、自分たちはガリアの地をシーザーに与えたのだとして、ローマ元老院に対して公式な誇りを抱いていた。

帝国戦争は平和を打ち立てることのできる唯一の戦争である。この戦争の勝利は決定的なものであり、くつがえすことはできない。敗者は勝者のうちに吸収される。たとえ敗者が独立を保ったとしても、報復の可能性は失われてしまう。酷い桎梏が課され、絶望的な反乱が起きても、成功することはまずないし、稀に反乱が勝利したとしてもこの勝利は消滅してしまう。反乱の勝者は速やかに支配層に吸収されてしまうからである。

(3) 貴族戦争

貴族戦争とは戦士貴族の行う戦争のことである。古代中国の封建制や中世ヨーロッパの封土制のもとに暮らした戦士貴族たちは様々な儀式や決まり事に従う独特の戦争法を創り出した。

歴史的に見ると戦争は狩猟と武芸の試合の間を揺れ動いている様に見える。あるいは皆殺しとスポーツのあいだを振り子のように行き来しているともいえよう。敵対状態は戦争にとって基本的な要素である。この要素があるので、戦争には陰謀という形態に接近する時代もあるし、また決闘という形態に近づく時代に向かうこともある。実際に、自立的な領地が分立していて、戦闘という仕業が特定の身分に特権として保有される封建的な社会では、この第二の傾向が著しく助長される。その場合には戦争は、一つの規律ある抗争という形を身につけることになり、遊戯や競技に見られるようなすべての約束事を備えた活動となり勝ちである。戦争はそこでは一定の限られた時間や空間の内部で厳密な法式に則って行われるものとして関係者に了解されている。戦争には決まったやり方があると誰もが思い込んでい

る。ある種の戦法は禁じられている。無防備の敵を攻撃することはないし、また予告無しに攻撃を仕掛けることもない。

そればかりではない。そもそも相手を殺害することや抹殺することは求められていない。相手が降伏すると申し出れば、それで勝敗は決することになる。

宣戦布告は戦争の法の典型例である。このおごそかな通告により、攻撃する側は、不意打ちという有利な戦法を放棄する。未開な戦争では戦いというよりむしろ不意打ちが多かったので、不意打ちこそ主要な戦法であった。

文明が洗練され、貴族的になるに従って、戦闘も法制化される。バラモン教時代のインドでは、社会体制が僧侶階級、武士階級、平民階級の三つに厳しく分かれていたが、戦争に関する法律もマニ法典に見られる様にこと細かく規制されている。古代中国では格調高い戦争の法が行われていた。

ヨーロッパ中世の戦いでは死者の数は限られていた。プレミュールの戦い⁽⁸⁾ではイギリスのヘンリー一世はフランスのルイ六世を打ち破った。この戦いの捕虜は140名、死者は3名と数えられている。

一般に、戦いは多くの死者を伴うものではなかった。一人の人間も一頭の馬も失われずに済んだこともある。傭兵たちの戦い方には戦意がなく、一度敵と遭遇すればたちまち部署を放棄した。傭兵たちの行う戦いはしばしば見せかけだけのものであった。合計二万の軍勢が四時間にわたって戦いながら、わずか一人の戦死者しか出なかったという例を、マキャヴェリが引いている。しかもそれは落馬したためだったという。貴族たちは互いに相手を殺害することを避けた。相手を抹殺することではなくて、相手を捕虜にすることが望ましかった。捕虜にして多額

(7) ガリア人の一部族。ラテン語では Aedul と呼ばれ、中仏東部のエヴェルネ地方およびブルゴーニュ地方に住んでいた。ガリア人の多くがローマに反抗したなかにあつて、この部族だけはローマ人に従順であった。前48年、クラウディウスはこの部族に都市としての特権を与えた。

(8) プレミュールはノルマンディーに近いユール県の地名である。ルーアンの東南約20キロにある。

の身代金を手に入れることが理想であった。

(4) 国家戦争

国家戦争とは国王たちが封建諸侯を打ち破る戦争のことである。国王は大砲を生産して封建諸侯の城塞を防御する城壁を破壊してしまう。こうした国家戦争が可能となったのは火薬の利用が発達したからである。また大砲の製造には多額の金銭が必要であって、費用を負担できるのは租税収入によって維持されていた王家の金庫だけであった。

1550年に最初の高炉がフランスに出現した。この世紀の末期には、フランス王国内に13の溶鋳炉が存在した。これらの溶鋳炉は国家のために生産を行ったが、すべて大砲の生産に当てられていた。これらの大砲は広々とした原野ではほとんど何の役にも立たなかった。射撃反復の速度は遅く、射程も小さいし、精度も低かったからである。ただし城塞を攻めるときには、大きな働きをした。王たちは、封建諸侯の城塞を、おもいのままに打ち破った。砲撃を行う者は武士とは見なされず技師と見なされていた。当時は騎士だけが武士と見なされていた。騎士の付け人や歩兵たちは武器をもった従者にすぎず、兵士とはみなされていなかった。歩兵隊 *infanterie* や歩兵を意味する *fantassin* という単語は、イタリア語の *fante* という従者を意味する語に由来する。戦争は騎士の間で戦われる戦さであって、騎士団が武力であり軍隊であった。部隊の人数は槍の数で数えられた。各隊には原則として一人の戦士しかいなかった。騎士だけが正式の戦闘員であった。それが重装備をした騎士である。騎士には、二人の騎乗射手と三人の従者が付くが、この二人の射手も戦闘時には徒歩となる。中世の軍隊は大勢の従者を従えた騎士たちの集団であった。そして従者たちは攻撃力がないう理由で戦士とは見なされなかった。国王たちは大勢の従者を雇って歩兵として使ったが、その戦闘力は極めて低かった。

以上が国王が行う国家の戦争である。

(5) 国民戦争

国民戦争とは近代国民軍が相互に行う戦争のことである。国民軍とは国民皆兵の原則に基づき兵役の義務を果たす市民兵からなる軍隊のことである。普墺戦争や普仏戦争が典型例である。国民戦争はフランス革命とそれに続くナポレオン戦争によって開始された。ナポレオン軍はフランス国民軍であったが、周辺の水の軍隊はまだ国王が指揮する近世の常備軍であった。これがナポレオン軍が破竹の進撃を続けた原因である。本来の国民戦争は英仏海戦に始まる。

(6) 全体戦争

全体戦争は総力戦とか全面戦争とも呼ばれる。全体戦争にいう全体とは何か。「全体戦争という言葉は、まず第一に、戦闘員の数が動員可能な成年男子の数に接近する、ということを意味する。第二にそれは、そこに使用される軍需品の量が、その交戦国の工業力を最大限に働かせるときの生産量に等しい、ということを意味する」190

成人男子を総動員し、工業力をすべて軍需生産に充てて両国が行う総力戦が全体戦争である。第一次世界大戦や第二次世界大戦がその事例である。局地的ではあれ、ヴェトナム戦争やイラク・アメリカ戦争は別の事例である。

大量殺戮と大量破壊を重ねる禍々しい全体戦争を始めたのは一体誰なのか。

どうすれば、全体戦争を阻止できるのか。これが人類には焦眉の課題である。

こうした課題と問題に答えるべく本書は執筆された模様である。

3. 本書の構成と問題点

本書の成立の順序はこうである。まず第二部が1951年に「戦争の眩暈」という題を付して発刊され

(9) ロジェカイヨワ自身はこの名称を使用してはいない。

ている。のちに第一部を構成する論考が執筆され、結びと序が書き加えられた。「戦争の原形態と小規模戦争」「古代中国の戦争法」「鉄砲 歩兵 民権主義（デモクラシー）」などなどである。

第二部の始まりでは「近代戦争の諸条件」が分析されている。そこではクラウゼビッツの『戦争論』が取り上げられ、近代国民軍の成立に伴って戦争の実態が一変してしまったことが確認される。極端への飛躍。これが新しい戦争に打ち勝つために必要不可欠の条件である。

序に見られる著者の問題関心はこうである。国民と軍隊が一体化すると戦争の災禍は巨大になる。国民と軍隊を分別すると戦争は儀式化して流血の惨事は減少する。国民と軍隊を分別した歴史の実例に古代中国の戦争法と中世ヨーロッパの騎士法がある。身分制の社会では戦争は儀式化して遊戯に近づくので、流血の惨事は減少する。これに対して人間の権利が平等である社会では戦争は無制限となり大量殺戮に歯止めがかからない。従って人間の平等と戦争の抑制を同時に実現することは難しい。このジレンマはまだ解けていない。

反論と批評の論点はこうである。大量殺戮を伴う全体戦争を産み出した思想的な要因は差別の思想である。人間の権利が平等に認められるとき、差別の思想は一掃され、全体戦争は消滅に向かう。ロジェカイヨワは全体戦争の起源を国民戦争に求めているが、これは国民軍が民族軍に変貌したドイツ軍の歴史体験を完璧なまでに見落とし見損なった結果発生した歴史認識の水準に於ける誤謬の産物である。

4. 全体戦争の起源

まず著者の立論の骨子を確認しよう
全体戦争の起源は何に求められるのか。これが本

書の主題となる問いかけである。ロジェカイヨワの解答は明快である。ロジェカイヨワはこの問いかけに対してそれは国民戦争であると解答する。

国民戦争が規模の拡大により全体戦争に至ることとなった。

普仏戦争と第一次世界大戦の間には、著しい規模の拡大が見られる。

その原因は武器の開発である。連発銃の発明に始まる殺傷力の増強が戦争の規模を急速に拡大した。

また戦争の組織として国民軍に加え更に市民兵の軍団が増強された。

戦争の規模がどれほど拡大したのか。普仏戦争と第一次世界大戦における戦闘の規模を比較すれば、規模の拡大する有様がつぶさに確かめられる。

1866年の普仏戦争は七週間続いた。そこで使用された弾薬は二百万発にすぎない。動員された兵士一人当たりでは七発である。従って一週間に一発という計算になる。(187)

普仏戦争の直前の戦闘の規模はこの程度であった。これが第一次世界大戦になると格段の規模となる。ロジェカイヨワの解説に耳を傾けて見よう。

1914年フランス軍参謀本部は、七五ミリ榴弾の生産を、日産一万三六〇〇発と見込んでいた。ところが戦争が始まるとすぐ、これに対する需要は五万発となり、それが1915年1月には八万発、同年九月には一五万発となった。また戦場において一軍団の火力を維持するためには、五万人の労働力が要と考えられていた。それゆえ、一六〇万人の働き手を雇い入れねばならなかった。一九一七年、イーブル⁽¹⁰⁾における第三回目の戦闘の際、その準備砲撃は一八日間続けられた。その際に発射された砲弾は四二八万三千発で、その総重量は一〇万七千トンにのぼった。この戦いに勝った連合軍は、一一五平方キロの土地を奪い返したが、そのためには、一平方キロ当

(10) フランス国境近くのベルギーの都市。第一次大戦を通じて、この都市を中心とする南北四十キロの地帯は、英独二軍のあいだの最大の激戦地となった。一九一五年四月二日、ドイツ軍がはじめて毒ガスを使用したのは、この都市の北方約一〇キロのランヘマルクにおいてである。

り死傷者八千二百二十二人といい犠牲を払ったのである。(190)

戦闘規模の拡大は余りにも巨大である。

5. 国民戦争の起源

それでは国民戦争の起源はどこにあるのか。

国民戦争はいつ始まったのか。近代国民軍の成立がその起源である。

国民軍が衝突すると国民戦争になる。普墺戦争や普仏戦争がその事例である。

国民戦争の始まりはフランス革命とそれに続くナポレオン戦争である。ナポレオンの指揮するフランス国民軍が他の国王の指揮する他国の常備軍を打ち破ることとなった。その到達点が英仏戦争である。二つの国民軍が海戦において激突するに至っている。

それではそもそも近代国民軍はどのようにして成立したのか。近代国民軍の起源を探って見よう。

近世常備軍には限界があった。近世の常備軍は傭兵からなる軍隊であった。傭兵の戦意は低く、規律も破られることがしばしばであった。

こうした傭兵部隊の欠陥を調べ、困難を診断して、その克服の努力が開始される。こうした努力の彼方に国民軍が登場する。国民軍を生んだ源は近世常備軍の弱さであった。どうしたら強い歩兵隊を編成できるのか。いくつかの試みが始まる。

貴族の歩兵隊を造る。これがマキシミリアン皇帝の苦心が向かった先である。

貴族は騎士であって歩兵を相手に戦うことはない。これでは信仰心に富んだプロテスタントの歩兵隊には勝てない。貴族が歩兵になるか、歩兵が貴族の精神を身につけるのであれば、強力な歩兵隊は編成できない。みづから歩兵の如くに徒歩で進軍して見せて、有力なメンバーからなる歩兵隊を建軍する。こうした試みにマキシミリアンは全力を投じた。当初は成果が生まれた。貴族たちが集まって立派な歩兵隊が編成された。騎士道の規則を定着させ

るためにそれにふさわしい式典や武器が用意された。だがマキシミリアンの企ては目的を達成するに至らなかった。厳しい規律や平民との雑居に嫌気が指した貧乏貴族たちはすこしずつ隊を去っていった。71-73

市民精神が無ければ強い歩兵隊は造れない。

最初に強力な歩兵を産出したのはフス派である。一種の兵役を自分たちに課し、その信念を守ろうとした都市民と農村民は、鎧を着た騎士たちの攻撃に効果的に抵抗する方法を見出した。馬車などを積み上げて堡壘を作り、その周りを堀や土塁で囲う。これは効果的な設営であった。後にアルバルトが加わる。アルバルトとは槍に戟をつけた歩兵が振り回す武器である。遠心力をつけて振ればその戟の刃先は鎧にも突き刺さる。強力な武器である。

プロテスタントの軍隊の源流がここにある。後にスイス連邦やユトレヒト同盟七州に見られる市民精神の源である。更にグスタフアドルフやクロムウェルの軍隊もまた同じ信仰心と市民精神を育む歩兵隊であった。

軍役と市民精神。これを大量に調達するにはどうすればいいのか。国民皆兵の原則を掲げ兵役の義務を定め市民を招集して国民軍を造ればいい。これが解答であった。近世常備軍が抱えていた不具合を治療する妙案がついに見つかった。傭兵ではなく軍役兵を使う。この方が安上がりでもある。市民兵がマスケット銃で武装するとき近代国民軍の原型が誕生する。

6. 貴族の戦争から全体戦争へ。

かつて貴族戦争の時代があった。古代中国の封建制や中世ヨーロッパの封土制すなわちヒューダリズムがその温床であった。だが戦士貴族の時代は終焉を迎える。王権が備えた常備軍と大砲によって堅固な城塞が破壊されてしまうからである。国家の軍隊とその起源は近世常備軍にある。絶対君主の武力装置として傭兵からなる常備軍が編制され、封建貴族

の息の根を止めてしまう。だが傭兵には不具合が伴う。戦意の不足と規律の低さである。こうした傭兵の欠陥を克服する試みが繰り返され、やがて国民軍に辿り着く。戦意と規律に富み安上がりな市民兵からなる国民軍は理想の軍隊であった。

ところが理想の国民軍はやがて変質してしまう。武器技術の発達につれ戦闘の仕方が完全に変容してしまうからである。ロジェカイヨワはこう総括する。

「戦争は第二の変革をとげ、また別の形のものとなった。この変革は技術的なものであって、政治的なものではなかったが、その結果は最初の変革の成果とあいまって、戦争を全体戦争へと近づけるものであった」185-6.

国民戦争を全体戦争に変えた原動力は、技術的なものであった。まず旋条銃が開発された。連発銃、機関銃がこれに続き、更に機動的な大砲が用いられた。これがロジェカイヨワの結論である。だが果たしてそうなのか。思想的な要因が決定的であったのではないのか。全体戦争を産み出した歴史の原動力は差別思想そのものであったのではないのか。ロジェカイヨワの学説は根本的に間違っているのではなかろうか。

ここで二つの戦争論とその対照を再度行ってみよう。

戦争の賛美と戦争の畏怖。その落差は大きい。その深淵を隔てるものは何なのか。戦争はいつから自由な戦いから神聖な戦いになったのか。

自由を求める戦いと神聖を求める戦いの差異はどこから生じるのか。

7. 更なる問いかけ。

名誉と栄光に溢れたドイツ国民軍はある時に醜悪で残忍なドイツ民族軍に変質した。この変質には思想的な要因が介在する。国民軍と民族軍の違いは何に基づくのか。ドイツ民族は優秀であるとする優生思想の生誕である。

1887年の冬という季節にそれは発生した。1888年中にドイツ皇帝があいついで死去した。ウィルヘルム一世とフリードリッヒ三世である。鷗外こと森田太郎は当時ドイツ留学中であつた。⁽¹¹⁾鷗外のこのドイツ日記には二人の皇帝の死去や葬儀の模様と言い及んだ箇所がある。後を継いだウィルヘルム二世は二つのことを実行した。まずビスマルクを更迭した。次いでヴィクトリア座を解体した。カイザーにどんな変化が生じたのか。何がカイザーにこうした決断を生み出さしめたのか。それは歴史誤認である。

8. 差別思想の輸出入。

帝国日本から帝国ドイツへ差別思想が輸出された。日本人は優秀民族であるのに対して、朝鮮人は劣等民族であるとする差別の思想である。

帝国日本において差別思想が成立した。「天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラス」⁽¹²⁾はその到達点である。

ドイツ帝国へ輸出すると変化する。「カイザーハ神聖ニシテ侵スベカラス」⁽¹³⁾

その結末はこうである。カイザーが歴史誤認に墜ち入った。明治日本が躍進した原動力を維新の志ではなくて神聖王の思想と思い違えてしまった。この歴史誤認がビスマルクからの離反や親政の動機であ

(11) 詳しくは森鷗外の「独逸日記」に加え、蓮沼啓介2019「破婚の深層」神戸法学雑誌69巻2号を参照されたい。

(12) 大日本帝国憲法の告文や勅諭や天皇条項に刻印された近代日本に於ける差別思想の成立した事情については、蓮沼啓介「解説」(新西周全集第四巻政事軍事編)を参照されたい(国書刊行会より近日中に刊行予定である)。

(13) 井口省吾と山口圭蔵が明治「廿一年十月一日ヨリ参謀本部ニ出仕」している。「外国ノ士官ニシテ独逸国ノ参謀本部ニ入ルヲ得タルハ蓋シ此兩名ヲ嚆矢トス」旧陸軍省文書(防衛研究所所蔵)。新妻佳珠子1985「森鷗外のドイツ留学の学資金についての一資料」目白近代文学第六号、62頁参照。

る。神聖王の思想を過大評価してしまったのである。更にヒットラーが続く。「総統ハ神聖ニシテ侵スベカラス」。差別の思想がドイツ国民軍をドイツ民族軍へと変質させ、やがて全体戦争を引き起こしてしまうのである。

9. ロジェカイヨワの誤認。

差別思想の輸出入を完全に見落としている。

その結果、栄光に溢れるドイツ国民軍と醜惡なドイツ民族軍を隔てる深淵を完璧なまでに見落としてしまったのである。

この見落としの帰結は深刻であった。

かくて近代の国民軍や国民戦争の持つ名誉と栄光は一切無に帰してしまう。

ドイツ民族軍の犯した戦争犯罪をすべてドイツ国民軍にまで遡らせてしまう。

挙げ句の果てはドイツ国民軍を大量殺人の源流として貶める。戦争賛美に呪いを掛ける。これがロジェカイヨワの戦争論の産み出した呪わしくも醜い結末である。

10. 戦いの復権

ペローナとは何者なのか。軍神マルスの妻とも妹ともいう。

トロイの木馬という不思議な物語がある。

スパルタ王レオニダスの妻というヘレーネがトロイの王子と駆け落ちする物語である。これはおかしな話である。そもそもトロイの王子の接待に美貌の妻を充てるであろうか。これは妹の間違いである。美貌の妹に外国の王子の接待を任せて自分は旅に出る。粋な計らいである。トロイ戦争の真実はこうである。ヘレーネが兄レオニダスのために密かに開門してギリシャ軍を城内に導き入れた。妹=いも=親

しい女性=妻という誤解の発生が疑われるところである。裏切った夫に味方する妻はいない。ヘレーネがスパルタ側に味方するはずがない。こうしてギリシャ軍の侵攻は永遠の謎となる。詩人の美しい想像力が羽ばたいてトロイの木馬という子供じみた夢物語が発生する。

あるいは女神ペローナもまた軍神マルスの姉または妹ではなかろうか。⁽¹⁴⁾

(2020年9月16日了)

(14) 更なる謎が残る。

妹であり妻であることはあり得るのか。妹を妻にすることは可能であろうか。

最近親婚という逆説が実はある。なぜローマ軍はバルシア軍に勝てないのか。

近親相姦の禁忌がバルシア軍との戦いにおいてヘラス軍を勝利させた原力であった。この禁忌はローマ軍には採用されていなかったのではないか。ローマにはかつて妹を妻にする習俗が残っていたのではないか。

